

解答

一

問一 そこを通過することで私にとって特別の意味を持つ人間関係や共同体といった他者とながりを持つことができる、その境界が「門」であり、誰でもが入れてもらえるとは限らないからこそ、くぐることができたことには価値があるのだ。

問二 一門

問三 「門」をくぐることで人は新たな人間関係や世界に踏み込むことになる。そのような「門」を前にして人は緊張し、入ろうか入るまいかと迷いためらい立ちつくすことで自分の心の求めるところを確かめることになる。そして、期待と不安をかかえながら、迷いや不安を断ち切って決断し門をくぐる。門の形というものは、このような門前に立った人間の心のありようやその行動がはらむ多様な意味に応える見事な構えを持っているものだ。

問四 人が住む空間には、内と外、私と他とがつながりを持ったり、それを拒んだりする場所としての門・入口が必要だから。

問五 部屋

問六 ① 裁 ② 遺物 ③ 軽視

二

問一 ヤービ族の「名まえ」には、ヤービ、マミジロ、セジロという三種類しかなく、生まれた順番や世代、見た目の特徴などを加えて区別しているため、「クーイ族史」を読む者が、いったいいつの世代のヤービなのか、セジロなのか、マミジロなのか、さっぱりわからなくなるのではないかとということ。

問二 同じ名まえをつけられた者が複数いることに違和感を覚え、ひとつひとつのものがはっきりと他と区別でき、また、そのものの特徴や個性を簡潔に言い表したような名まえがつけられるべきではないかと考えている。

問三 「ほのおの革命家」という名まえは、しいたげられたどれいを解放しつづけ、どれいのいない世の中をつくったという強烈な行動力と社会を変えた人物というイメージを歴史と人々の心の中に刻みつけ、定着しているということ。

問四 自分だけのとくべつな名まえというのは、びったりしすぎれば、その名まえに自分が逆にしばられ、名まえどおりの自分でなければならない不自由を感じるのではないか。むしろ、代々受けつがれてきた名まえのほうが気楽で自分というものを自由にしてくれるのではないかと考えている。

問五 ① 感情・人情など ② 満員・肥満など

問六 エ